

論文の内容の要旨

論文題目 啓蒙の世紀の神秘思想
——サン＝マルタンとその時代——

氏名 今野 喜和人

18世紀フランスを中心に全欧的規模で興った神秘思想の潮流「イリュミニズム」を代表する思想家、サン＝マルタン (Louis-Claude de Saint-Martin, 1743-1803) に関する研究である。フランスのロマン主義文学、ドイツのロマン主義哲学に与えた彼の影響についてはしばしば指摘されるが、その著書の難解さ、周辺に存在するオカルティズム的要素が接近をためらわせる原因となって、これまで特に日本では真正面から取り扱われることがなかった。本論では「啓蒙の世紀」と呼ばれるフランスのこの時代に、なぜサン＝マルタンという神秘思想家が生まれたのか、大革命による社会と思想の混乱期において自らをどのように定位させたのかを、同時代に向けた彼のまなざし、およびイリュミニズムと関わる他の著作家との比較を通して明らかにする。その過程で啓蒙と反啓蒙、18世紀の合理主義的精神と古代以来の神秘思想の関係が考察されるが、両者の間には単なる対立・衝突だけでなく、様々な相互浸透や混淆が見られることも指摘する。

まず序論で「イリュミニズム」をいわゆる「エゾテリスム」の歴史的形態として把握するために思想史的な概説と用語の定義を行い、サン＝マルタンという思想家の誕生の背景にあるものを描き出した後、「人と作品」について、ごく簡単な紹介を行ってその後の叙述の基礎とする。

本文全体は二部に分かれ、第一部「啓蒙からロマン主義へ」では、「哲学者の敵、神学者の敵」と題した第一章において、サン＝マルタンがジャン＝ジャック・ルソーという巨大な存在に対して抱いた親近感と違和感を通して、彼の思想家としての自己認識と使命感を明らかにする。啓蒙哲学者とカトリック教会という18世紀の二大対立項のどちらにも敵対する姿勢において共通しながら、ルソーはサン＝マルタンにとって、「真理」への道

の半ばで立ち止まった人間、神秘思想的方向性は持ちながら神の「恵み」を得られなかった存在として捉えられる。そのような理解の一面性は言うまでもないが、ルソーの矛盾した宗教観を照らし出す一助にはなるだろう。

こうしてサン＝マルタンは神秘思想を語るにあたってしばしばルソーの文章を自らの立論へと引き寄せ、時代の支配的思潮に戦いを挑むのであるが、その典型的な例が言語をめぐる議論に見られる。第二章の「言語論における〈啓蒙〉と反〈啓蒙〉」では、ルソーの『不平等起源論』において語られたアポリアが、当時の言語起源に関する議論を如何に規定したかという問題から概観し、主に「恣意性」のテーマをめぐって人間の言語について神秘思想家がどのような主張を行ったかを見る。サン＝マルタンの言語観は人間起源説と神授説、感覚論と古典的合理主義、ひいては〈啓蒙〉と反〈啓蒙〉の対立を調停する方向性を持ち、その体系化はクール・ド・ジェブラシの論考において完成を見るものの、ロマン主義の言語有機体説に影響を与えたこと以外は将来的には否定されていくものである。だがこれらの論争は神秘思想が百科全書派の哲学と同じ資格で議論に参加し得たことを証明し、18世紀が宗教・哲学・科学・文学の渾然一体となる場を提供した最後の時代であることを示している。

ルソーを援用した神秘思想的言語観の開陳というサン＝マルタンの姿勢はエコール・ノルマルにおける「イデオログ」ガラとの論争で徹底される。フランス革命の教育改革の一環として生まれたこの学校にサン＝マルタンは生徒として参加を要請されるが、感覚論哲学の代表者である講師ガラに、宗教的使命感から公開論争を挑むのである。第三章「イリュミニストとイデオログ」ではこの経緯を明らかにし、啓蒙からロマン主義への結節点に位置するこの論争の思想史の意味を論じる。

イリュミニズムの勃興期はいわゆる「プレ・ロマンティズム」の時代とも重なり合っており、文学・思想史上の移行期に神秘思想は重要な役割を果たした。啓蒙の終焉、ロマン主義の誕生を画すエポックの中でも重要な、シャトブリアン『キリスト教精髄』出版(1800年)に対するサン＝マルタンの反応を考察するのが第四章である。無神論・唯物論という共通の敵を持つ点で両者の宗教擁護の姿勢はむしろ重なり合うものの、サン＝マルタンは同書を「真のキリスト教とカトリシズムの混同」という観点から批判し、神秘思想と既成教会の間にある距離を明確な言葉で述べる。サン＝マルタンは宗教を文学の中に溶解して希薄化することにも批判的であり、ある意味でイリュミニズムとロマン主義が乖離する地点を既に見通していると言えるだろう。

ロマン主義文学へのサン＝マルタンへの影響という点で最も有名なのがバルザックの例であり、第五章では、『セラフィタ』や『谷間の百合』他の作品からその受容の特質が明らかにされる。サン＝マルタン思想はバルザックの中で、秘められた信仰の対象というような排他的なものでも、単に時流におもねるための装飾的なものでもなく、彼独自の宗教体系を形作る数多の要素のうちの一つとして存在を主張している。

第一部の最終章「サン＝マルタンにおける人間と自然」は、エコロジーと宗教をめぐる現代の議論の中で、彼の言葉がどのような意味を持ちうるかを論じたものである。キリスト教の中にある「自然軽視」や「人間中心主義」が近代西洋科学と手を組んで環境破壊をもたらしたともいわれるが、こうした傾向とも決して無縁でないサン＝マルタンの主張をどのように受け止めるべきか、矛盾と対立に満ちたテキストから主旋律を聞き取ることを

目指す。人間の力と限界、人間と自然の運命の連帯性を語る彼の言葉は、環境倫理のメッセージにも十分転調可能だと思われる。

第二部は「神秘思想家のフランス革命」と題し、サン＝マルタンの革命観を、周辺の「イリュミネ」の反応とも引き比べながら解明する。革命直後に喧伝されるようになった「陰謀説」によってサン＝マルタンには革命家の思想的黒幕のように扱われた時代があるかと思うと、反啓蒙＝反革命という連想から保守反動の神政主義者というイメージも付与されていて、現在でも明確な実像を結ぶに至っていない。ここではまず、第一章「革命とイリュミニズム」によってフリーメーソンや民衆の信仰のありようと革命の関係を整理し、サン＝マルタンも連座しかかった有名な「カトリーヌ・テオ事件」を通して、彼が革命に捩理の発現を見、この思想的大変革の中で自らに与えられた使命を認識するまでを描く。

第二章では 1794 年に出版されたサン＝マルタンの革命論を、ジョゼフ・ド・メーストルの立場と比較の上で明らかにする。大革命に神意を見る点でメーストルと共通しながらも、サン＝マルタンは王政の復古やキリスト教会の再建を求めない。彼の関心は実際の政治的綱領ではなく、「宗教戦争」としてのフランス革命にあり、その帰結すべきところは神秘思想の開花に他ならなかった。

サン＝マルタンが物した唯一の小説『クロコディル』では、この宗教戦争の本質が空想小説の形で寓意的に描かれる。革命期のパリに現れる怪物「クロコディル」はサン＝マルタンが敵対視した啓蒙主義、既成教会、オカルティズムの権化であり、その最終的敗北は神の国実現の前段階たるべき精神革命を象徴するものである。

第四章ではサン＝マルタン自身の革命観からいったん離れ、ニコラ・ド・ボヌヴィルという革命家の立場を考察する。ジロンド派と関係の深い政治クラブ「セルクル・ソシアル」の創始者として知られるボヌヴィルの経歴を概観した後、しばしば指摘される「マルチニストの革命家」というレッテルが正鵠を得たものであるかどうか、彼の残したテキストや、当時の資料によって検証する。その結果、サン＝マルタンの影響は確かに認められるものの、総じて限定的なものであり、むしろ政敵（特にラクロ）が付与しようとした「狂信家」としてのイメージがこの説の根底にあることが示される。

第五章では、やはり「マルチニスト」の呼称がつきまといながら、ボヌヴィルと対極的な政治的立場を取り、恐怖政治の開始以前に反革命の廉で処刑されたジャック・カゾットの革命観と宗教観を考察する。結論としては、サン＝マルタンが属したのと同じ教団に一時期加わったのは事実としても、思想の吸収と言えるべきものは軽微で、様々な点でカゾットの思想はサン＝マルタンの神秘思想と隔絶していることを述べる。ここでも迷信性・狂信性を表す符号として「マルチニズム」のレッテルが使われているに過ぎないのである。

終章では大革命の動乱が終わってから、1803 年の死までのサン＝マルタンの時代評を考察する。千年王国論者や予言者たちの期待とは一線を画していた彼の革命観ではあるが、「大いなる時代」の到来を予感したことへの反作用から、彼は一時期失意の時を過ごす。ナポレオンの登場が再び希望の火を灯しかけるが一時的なもので、晩年は来世の至福への期待を胸に隠棲的な生活を行い、フランス革命による思想変革と、その中で果たすべき自らの役割についての夢想は死後に繰り延べられる。その期待が幾分なりとも実現されたか否かを判定するためには、18・19 世紀の思想史、文学史の中にサン＝マルタンを正当に位置づけることが不可欠であろう。